後楽園学会感想

みなさま

先日、中央大学後楽園キャンパスでホワイヘッド学会がありました。村上先生はまだ数週間しか経ってないの？と驚かれたようですが、その後、私のほうは色々ありまして、もう数カ月も前の遠い過去のことのように感じられます。

その際の感想を浦井、村田、村上３先生に書いて送ったのですが、掲示板での開かれた議論にしたいという浦井先生のご要望で、若干手を加え、アップすることにしました。雑な文章ですが、時間が経ち、大きく書き換えるのはもう無理ですね。

貼り付けるのも可能かもしれませんが、かなり見にくくなると思われるので、貼付ファイルでお送りします。

＊

先日の中央大・後楽園校舎での学会は、私にとって甚だ実り多いものとなりました。長年もやもやしてきた問題に一定の見通しを与えることができたからです。

浦井先生が仰るように、命題論は『過程と実在』という書物の胆と言ってもいいと思います。それは主語―述語関係が成立する以前の、シンボル＆イメージの立ち上げに関わる。

命題それ自体が生起するとき、これを「活動体」actual entity と呼んで差し支えないでしょう。とはいえ、そこには幅があり、ベルクソン風に言えば、一定の「持続」があると見なされる。命題の始まりがあり、それが成就して満足する極みがあり、消滅して客体的不死へ移行する。命題にも春夏秋冬があるのです。

そもそも「命題」なる語はpro-position であり、entityなき立題、entity を先取りする提題であって、それは概念ないし欲求により抱握される。そこからシンボル体系、ひいてはイメージが立ち上がってくる。

命題を主述の分離の起源として、また真偽の分解の源泉として捉え、以後の西欧文明における論理学の動向を決定づけたのがアリストテレスです。それは以後の西洋社会の思考の規範ともなりました。

20世紀初頭におけるアリストテレス復興には目覚ましいものがありました。ホワイトヘッドは言うまでもありません。ベルクソンの名目上の師は、アリストテレスの近代的読み直しを企てたラヴェッソンで、ベルクソンは博士論文の補論としてアリストテレスの場所論を提出しています。ハイデガーの場合、そもそも本人がアリストテレス学者でした。彼らは皆それぞれのやり方で近代の超克を企てていました。我らが西田幾多郎も、この流れに連なります。

とはいえ、ホワイトヘッドの命題論におけるような重層的な論理は西田には全くなかった。命題を可能にする背景への見通しを欠いていたように思えます。西田の言う述語的世界観とは、すでにシンボル体系が立ち上ってからの、分節化された世界を前提とする物語ではなかろうか。

１） 菱木政晴「浄土教における仏身論とプラグマティズム」

当日は時間の都合で聴けなかった発表を、会場で入手したコピーで読みました。せっかくですので、若干の感想を記しておきます。

菱木先生のご論文ですが、以前打ち上げの席で、仏教からなぜ浄土教のような鬼っ子が生まれてしまったのか、お話を伺ったことがあり、もっと詳しいことを勉強したいと思っていました。今回の発表は、まさにその話題で、期待して読み始めたのですが、途中でズッコケました。菱木先生の言い分だと、主述以前の命題を思索すること自体が悪い意味での神秘主義であり、存在の我有化であり、忌むべき迷妄だという話になってしまう。

主述以前の命題の場所とは、巨大な情動の渦巻く地平であり、それ自体は何ら神秘主義的ではありません。たとえば音楽を聴く時に私たちが実感するものです。この件に関してホワイトヘッド『形成途上の宗教』に明確な説明があり、菱木先生も参照を求めているのですが、どうもまるで読めていない、というか読むのを拒絶しているように思われる。なのになぜ、ホワイトヘッド研究なのか？ そもそも菱木さんは宗教に何を求めているのか？

実際のところ、これは菱木さん個人の問題というより、日本の１つの世代の通弊と私は見ます。理性への疑いをまるで持っていない。仏教を完全に理知的な教理体系と見なす。そこでは修行、ひいては解脱の意義が見失われる。宗教である意味が無くなってしまう。l

ホワイトヘッドによれば、宗教的な熱情とは端倪すべからざるもので、それにより人間社会は統合され、文明は発達してきた。とはいえ信仰は得てして野蛮な迷蒙に陥りかねず、私たちはこれを合理化すべく努めねばならぬ。哲学は宗教を概念化することで昇華する。いわば健全で建設的なエネルギーへ変換するのです。

合理性ないし理性の立場から、宗教的情念やヴィジョンを斥けるのでは全くない。それをいわば脱構築し、文明建設への燃料として活かす、それがホワイトヘッドの形成途上の宗教です。これに対して、たんなる理性万能主義が世に平和をもたらすことはないでしょう。いや、むしろそれこそが戦争の道具になってきた。武器とされてきた。

命題を不可視の全体として理解すること。それはたんなる理性主義には収まりません。だからと言って、神秘主義とは縁もゆかりもない。むしろ、この両端を結びつけ、そこに調停をもたらすのが哲学の役割と見なさねばならぬ。

これは西田にも関わってくることで、彼の哲学においては主語の拘束性と、そこからの自由というモメントへの把握が不徹底です。述語への解放と、情動への再帰はまず何よりも歓喜であるはずなのに、彼の哲学の基層主調は「悲哀」です。この点に疑念を持ち、深入りするのをやめてしまいました。が、アリストテレス→ホワイトヘッドという観点から、その述語論理の意味を改めて考察する必要があるかもしれません。

2）　有村直輝「1924-25年頃のホワイトヘッドにおける形而上学と論理学」

ようやく刊行が始まったホワイトヘッドの講義録に基づき、アメリカに移り住んだ1925年代前後に、この哲学者が論理学にどのようなアプローチをしていたかを有村さんは検討しています。その分析を見るにつけ、なかなか興味深い内容を孕んでいるようで、折を見て、どこかの図書館で目を通して見ようと思います。

有村さんは『科学と近代世界』の以下のような一節に注目します。「論理の調和は鉄の必然で宇宙に横たわっているのに対し、美的調和は、繊細で微妙なものに向かう、途切れがちな過程の一般的な流れを形づくる生きた理想として、宇宙の眼前にある」（SMW18）。

自然の秩序の根底には、さらに根底的な事物の秩序が存し、そこに上記の論理と美の調和が孕まれている。この深い意味での論理を基底的なものと見なしていいのだろうか。

ホワイトヘッドは「私たちの4次元の宇宙は444次元でもよかったのではないか？」と講義において問う。「かくあるが、別様であったかも知れない何かが常に存在しているのである」（CEW.I, 382）。自然がそうであるとすれば、上記の「鉄の論理」も甚だ怪しいものになる。論理そのものが別様であってもよかったかも知れない。

有村さん本人が自覚しているように、ホワイトヘッドにおける論理の問題は、その美学との関係から論じられねばならない。本論文はそこまで行っていません。しかるに、この問題こそホワイトヘッド形而上学の成否を問う、決定的な問題ではなかろうか。それは同時代の数学者ポワンカレが問うていた問題でもあります。思うに、この哲学者が想像力の問題について手をこまねいているように見えるのは、旧来の西欧の伝統的な美学を暗黙のうちに前提としたせいで、想像力の自由奔放さを捉え損なっているからではないか。

３） 村田康常「遊びと思弁哲学――方法論として、また宇宙論として保存」

村田先生のご論考について思うことを述べます。遊びの問題はバタイユとカイヨワに共通するもので、そこに想像力の問題が関わるのは当然と言えば当然です。バタイユは自ら遊びを大いに実践しつつ、哲学的・存在論的な議論を練り上げ、年少のカイヨワはそれを横目に、アカデミックな考察を行なう。両者は一時そんな協力関係にありました。

いま思えば、カイヨワは遊びの中の想像力の論理に注目し、これが人間に限定されず、生命世界全体に相渉るものだと想定していた。これに対してバタイユは想像力の問題にまるで不感症でした。ブルトン主導のシュルレアリスムは想像力の至高性を謳い上げていましたが、バタイユはその文学至上主義を痛烈に批判し、両者は猛烈な派閥争いを繰り返した。そんなバタイユが想像力を擁護することなどあり得なかった。むしろ政治的行動の可能性を模索していた。

６８年の５月革命はまさに「想像力に権利を！」という呼びかけでした。その雰囲気が仏文関係では色濃く残っていて、私も修論ではバタイユにおける遊びと真面目なものという主題を論じていたような記憶があります。そこでの遊びとは存在の遊戯ですね。オイゲン・フィンクの名著があります。

で、バタイユの遊びは困ったことに想像力なき遊びであり、それゆえに「蕩尽」なのです。かれは年下のカイヨワからもっと虚心に学ぶべきでした。ハイデガー＝コジェーヴ経由の存在論の圏内から、ついに出られず終わった。

さて、以上のような遍歴を経てきた私には、村田先生の「遊び―想像力」論は、さまざまな論者の論点を盛り込んだバランスのよい論考とはいえ、ごく一般的な話に終始しているように思われる。想像力は「構想力」（カント）でもあって、カントはまさに想像力の論理を構築しようとしたのです。ホワイトヘッドは（ベルクソン同様）カントを乗り越えるべく四苦八苦している。

遊びにしても、想像力にしても、無―論理ではいささかもない。それどころか、遊びや想像力こそが論理の根底にあって、論理を形成しているのかもしれない。カントの構想力の議論は、まさにそこに関わる。この件に介入しようとするとき、カントは避けて通れません。

68年5月の想像力への呼びかけは、フランス社会ひいてはヨーロッパ社会の大きな変革には直接結び付かず終わった。なぜかと言えば、そこには論理がなかった、論理を見出せなかったからではないでしょうか。むろんそれは単純素朴な論理主義とか理性中心主義ではあり得ず、もっと曲折に富む、しなやかな論理でなくてはならない。私としてはイメージやシンボルの論理として、これを追求しているつもりです。

以上のごとく、想像力の問題は半ば古典的な哲学的問題であり、それにホワイトヘッドがいかに取り組んでいるかは、もっと詳細に検討する余地があります。

また、それは現代的な問題でもある。というのも、現代の認知科学やＡＩ研究において、やはり想像力を人間に固有の能力として捉えようとする動きがあって、その界隈のことも私たちとしては視野に入れるべきでしょう。

実際のところ今回の自分の発表では、ホワイトヘッドにおける想像力と自由の問題に言及しながら、それをまとめ切ることができませんでした。この件はベルクソンの「作話能力」、ひいては自由の問題と絡めて考える必要があるでしょうし、もっと大局的に大御所のカントやヒューム、近いところではサルトルや三木清らの議論を参照する必要もあると、自分では痛感しております。今回の発表では、ハンス・ヨナスに触れるだけで終わりました。

＊最後に。

ドゥルーズはどこかで「哲学とはキャッチフレーズを作ることだ」と述べていました。これは、より正確には「命題」を提起することであり、未来の来たるべき法の基礎を提供することだと私は思います。